

B2 とはどんなレベルか

—教育実践に向けた CEFR B2 Can-do の質的分析—

篠崎 撰子 (国際交流基金マドリード日本文化センター)

大船 ちさと (国際交流基金日本語国際センター)

要旨

本研究は、CEFR の能力記述文 (以下 Can-do) の質的な分析を通して B2 レベルの特徴を明らかにし、その結果をもとに教育実践で活用可能な「B2 レベルの学習者が身につけるべき要素」を提案することを目的とする。

本研究では、まず B2 レベルの特徴を明確にするために、抽出した 6 つの分析用コード (詳しく、簡潔に、参加する、適切に、情報を選ぶ、流暢さ) を用いて、CEFR の B2 の全 Can-do 112 件と B1 の 129 件を対象に質的分析を行った。そして、その結果を基に「伝える力、積極性、調整力、相手への配慮、幅広い話題、多角的な視点」の計 6 つを、学習者に目標として示しやすく、教育実践においても活用可能な「B2 レベルの学習者が身に付けるべき要素」として提案した。

【キーワード】 CEFR、B2 レベル、Can-do、JF 日本語教育スタンダード

Keywords: CEFR, B2, Can-do, JF Standard for Japanese-Language Education

1 はじめに

本稿は、国際交流基金の JF 日本語教育スタンダード¹ (以下 JFS) に基づく B2 レベルの教材開発のために行った調査・分析について報告するものである。なお、本研究には、共同研究者として清水まさ子 (国際交流基金日本語国際センター) が参加し、2015 年から 2016 年にかけて行った。

B2 は、「ヨーロッパ言語共通参照枠 (以下 CEFR)」(Council of Europe 2001) では B1 とともに「Intermediate (中級)」と位置付けられているが (Council of Europe 2001:23)、国際交流基金の「みんなの教材サイト」および国際交流基金 (2019:16) では「上級」と位置付けている。日本語の学習においては、中級 (B1) から上級 (B2) にレベルアップする際に「頭打ち」となる状況がよく見られる。これは、B1 レベルになるとストラテジーを利用しながら日本語である程度の状況に対応できるため、そのレベルからさらに上のレベルに上がるためには次に何をめざせばいいのか、学習者自身がイメージしにくいからだと考えられる。

このような状況から脱却するには、B2 レベルの教材でただ言語知識を増やしたり、個別の言語活動に習熟したりするのではなく、学習者が自身の日本語をモニターするための視点や枠組みを持てるようにすることが重要ではないか。またその視点は、技能別に細かく提示されるものではなく、技能を越えて共通する特徴がわかりやすくまとめられているといいのではないか。筆者らはこのような問題意識を持ち、本研究に取り組んだ。

2 先行研究：CEFR の Can-do 分析

CEFR 第3章「共通参照レベル：全体的尺度」では、B2 について次のように述べている。

- ・自分の専門分野の技術的な議論を含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる
- ・お互いに緊張しないで母語話者とやりとりができるくらい流暢かつ自然である
- ・かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる

また、同 3.6 「共通参照レベルの内容の一貫性」では、B2 の特徴として「効果的な論述」「社交的な談話」「新たな高い言語意識（感覚）」を挙げて詳しく述べている。これらの記述により B2 レベルの凡そのイメージを持つことはできるが、具体的な教育実践を考えるには不十分であり、さらに、学習者自身が目標として参照するには抽象度が高すぎるといえる。

CEFR の各レベルの特徴を明らかにすることを目的とした先行研究としては、福島（2009）および塩澤・石司・島田（2010）が挙げられる。CEFR の Can-do はコミュニケーション言語活動とコミュニケーション言語能力に大きく分けられ、さらにコミュニケーション言語活動は「活動」「方略」「テキスト」の3つに大きく分類されるが、いずれの先行研究においても、A1～C2 レベルの「活動」および「方略」Can-do を対象としている点が共通する。そして、該当する Can-do 365 件を形態素解析し、福島（2009）は各レベルと各語の共起を、塩澤ほか（2010）ではレベルごとに出現度数が高い順にデータを抽出することにより、各レベルの特徴を示した。これらの研究の主眼は、6 レベルの違いを明らかにすることであり、両研究で B2 レベルの特徴とされた語は、表 1 の通りである。

しかしながら、これらの特徴的な語だけでは学習者も実践者も B2 レベルの言語コミュニケーションの具体的なイメージを持ちにくく、どのような実践を行えばいいのか、あるいは言語学習の際に何を意識して学べばいいのかが掴みづらい。そこで本研究では、B2 レベルの言語コミュニケーション能力を目指すためにイメージしやすい表現で B2 レベルの特徴を示し、その結果をもとに教育実践で活用可能な「B2 レベルの学習者が身につけるべき要素」を提案することを研究課題とする。

表 1 先行研究で抽出された B2 レベルの特徴

福島（2009）	塩澤ほか（2010）
議論、理解、自分、話、関連、詳細、視点、分野、説明、意見	理解、自分、議論、関連、話題、詳細、情報、説明、専門、はっきり、意見、視点、点、複雑、分野、母語、様、話者

ゴシックはそれぞれ B2 で初出のもの。

3 分析の対象および方法

3.1 分析の対象

本研究では CEFR（Council of Europe 2001）で公開されている Can-do のうち、先行研究

でも対象としている言語活動と方略に加えて、言語能力とテキストを含む B2 の全 Can-do 112 件²と、比較対象のために同じく B1 の全 Can-do 129 件を分析した。言語能力とテキストを含めて分析した理由は、B2 の Can-do には B1 まで以上に、活動 Can-do に能力 Can-do の要素が入り込んでいると考えたからである。たとえば以下の 2 つの活動 Can-do は、それぞれ能力 Can-do の質的な要素（ゴシック部分）が含まれており、これらの質的な条件を満たさなければ B2 レベルとはみなされないということになる。そこで、B2 の特徴を明らかにするためには、活動 Can-do だけを対象とするのでは不十分であり、能力 Can-do も含めて検討する必要があると考えた。

- ・ 実際、もしくは想像上の出来事や経験について、複数の見解を相互に関連づけ、当該のジャンルの書記習慣に従って、明瞭かつ詳細に記述文を書くことができる (B2.2 作文を書く)
- ・ 自分の考えや意見を正確に表現できる。また、複雑な筋立ての議論に対し、説得力をもって見解を提示し、対応できる (B2.2 フォーマルな議論)

3.2 分析の方法

本研究では、教育現場での活用を前提に、教師である筆者ら 3 名が各自の教授経験を踏まえて質的に分析することとし、以下の 2 段階で分析を行った。質的に分析することにより、先行研究にある形態素解析やテキストマイニングのような量的・機械的分析とは異なる、より実践者にも学習者にもイメージしやすい特徴が得られると考えた。

- (1) 調査者 3 名が個別に CEFR および JFS³ の B2 Can-do 全 198 件を概観し、B2 の特徴を表すと考えられるキーワードを書き出した。次に、それらのキーワードを KJ 法で分類して分析用のコードを抽出した。
- (2) 同じ 3 名がそれぞれ、CEFR の B1 と B2 の全 Can-do 241 件に上記の手順で抽出されたコードを付与し、3 名の結果を照合し、精査した。

分析用コードの抽出の際には、JFS の Can-do 86 件も参照した。JFS の Can-do は CEFR Can-do よりもより具体的な場面を想定した Can-do となっているため、CEFR Can-do が示す抽象的な言語行動から具体的な言語行動を想起する際に調査者 3 名の基準を統一する役目を果たすと考えたためである。

4 結果

3.2 で述べた手順で分析した結果を以下に述べる。

4.1 抽出された分析用コード

まず、上述の(1)の手順で調査者 3 名が CEFR および JFS の B2 Can-do 全 198 件を概観し、B2 の特徴を表すと考えられるキーワードをそれぞれ付箋に書き出した。それを図 1 のように模造紙に貼って KJ 法を参考にグループ化した結果、最終的にその特徴を示す 6 つのコード、「流暢さ」、「詳しく」、「簡潔に」、「適切に」、「情報を選ぶ」、「参加する」が抽出された。

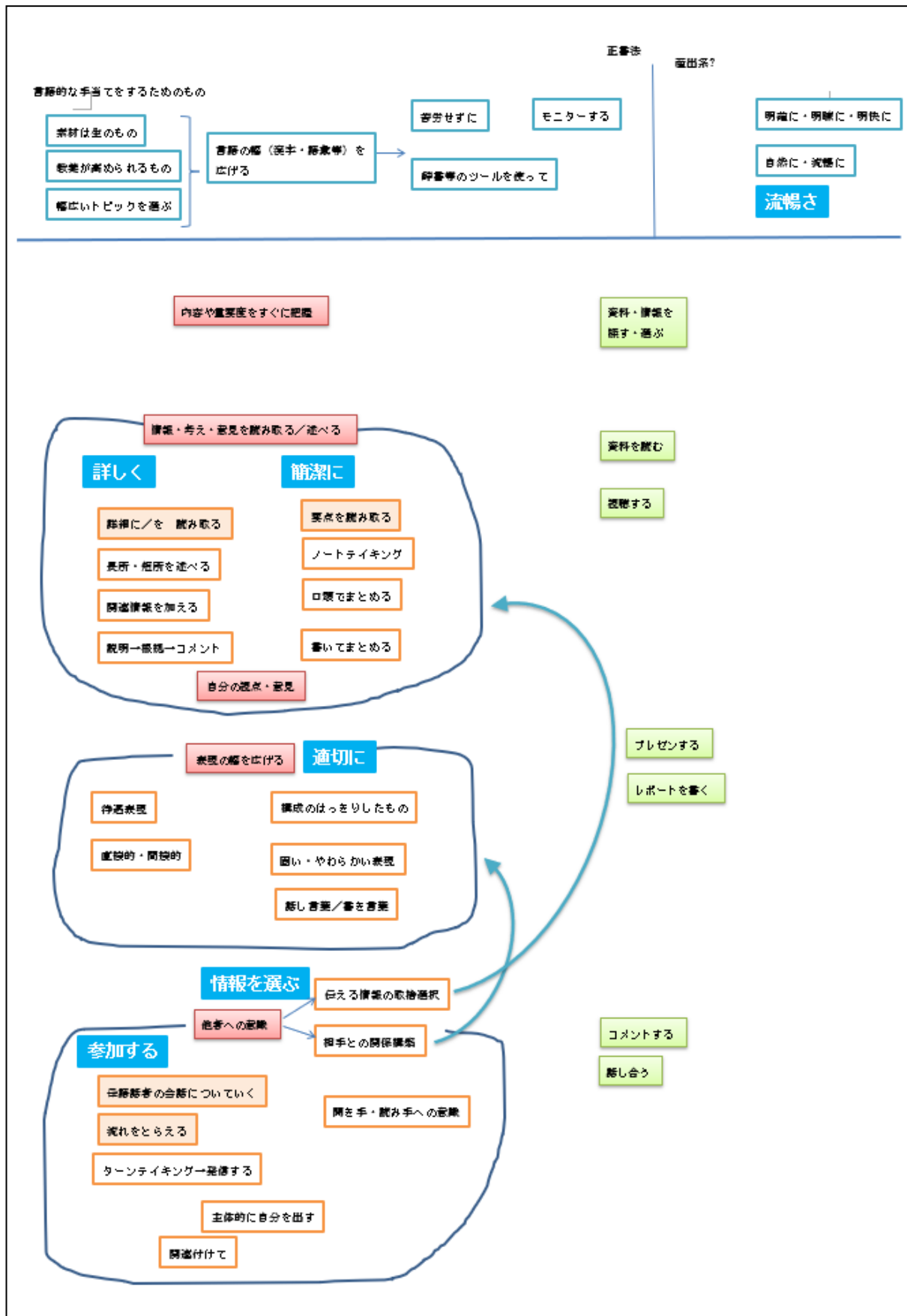


図1 抽出された分析用コード

4.2 コード付与の結果

次に、上述の手順(2)で同じ調査者 3 名がそれぞれ、CEFR の B1 と B2 の全 Can-do 241 件に先の分析で抽出した 6 つのコードを付与した。そして、3 名の結果を照合し、異同を確認・調整したうえで、以下の作業を行った。

- ・6 つのコードが付与できなかった Can-do を検討し、「内容」「推測」という新しいコードを作成・付与した。
- ・「聞くこと全般」のような Can-do はその活動の全体的なイメージを示し、多様な要素が入っていることから、先に付与していたコードをはずし、別に「全般」というコードを付与した。
- ・各コードを付与した Can-do を概観し、Can-do の数が多いコードについては、下位コードを作成・付与した。

例) 参加 (コメント／ついていく／発言権／貢献)

詳しく (つなげる／関連付け／明確に／整然と、など)

表 2 は前述のコードを付与した結果をまとめたものである。表 2 では、最初に抽出した 6 つのコード (赤字) と、その後に追加付与したコード (灰色のセル) について、該当する Can-do の個数 (黒字) と割合 (青字) をレベルごとにまとめている。割合の赤字はそのレベルで特徴的と考えたところである。

表 2 コード付与の結果

	詳しく	簡潔に	適切に	参加	流暢さ	選ぶ	内容	推測	全般	合計
B2.2	6	0	4	8	2	0	3	0	4	27
	22.2%	0.0%	14.8%	29.6%	7.4%	0.0%	11.1%	0.0%	14.8%	100.0%
B2.1	11	2	4	9	3	0	3	0	5	37
	29.7%	5.4%	10.8%	24.3%	8.1%	0.0%	8.1%	0.0%	13.5%	100.0%
B2	8	7	9	14	2	1	3	1	3	48
	16.7%	14.6%	18.8%	29.2%	4.2%	2.1%	6.3%	2.1%	6.3%	100.0%
B2計	25	9	17	31	7	1	9	1	12	112
	22.3%	8.0%	15.2%	27.7%	6.3%	0.9%	8.0%	0.9%	10.7%	100.0%
B1.2	4	7	6	11	1	1	6	0	3	39
	10.3%	17.9%	15.4%	28.2%	2.6%	2.6%	15.4%	0.0%	7.7%	100.0%
B1.1	5	9	9	10	1	1	1	0	3	39
	12.8%	23.1%	23.1%	25.6%	2.6%	2.6%	2.6%	0.0%	7.7%	100.0%
B1	8	5	7	12	3	0	9	2	5	51
	15.7%	9.8%	13.7%	23.5%	5.9%	0.0%	17.6%	3.9%	9.8%	100.0%
B1計	17	21	22	33	5	2	16	2	11	129
	13.2%	16.3%	17.1%	25.6%	3.9%	1.6%	12.4%	1.6%	8.5%	100.0%
合計	42	30	39	64	12	3	25	3	23	241
	17.4%	12.4%	16.2%	26.6%	5.0%	1.2%	10.4%	1.2%	9.5%	100.0%

B2 レベルの数値を見ると、最初に抽出した 6 つの分析コードに分類された Can-do が 8 割以上を占める結果となり、一定の妥当性はあったと考えられる。ただ、追加したコード「内容」「全般」も比較的高い割合を占めている。このうち、「全般」は各技能の全体的な

イメージを示すもののため、考察の対象外としたが、「内容」に関しては、受容カテゴリーに位置付けられる Can-do の多くにこのコードが付与されていることもあり、考察の対象とした。

図2は、B1とB2のレベルごとに、7つのコードが付与された Can-do の割合を比較したものである。「簡潔に」「選ぶ」「内容」はB1の方が多く、「適切に」「参加する」はほぼ同数、「詳しく」「流暢さ」はB2の方が多くなっている。

数値で見るとB2の特徴は「詳しく」「流暢さ」となるが、その他のコードもレベルにより質的には異なると考えられる。そこで、次章では7つのコードの付与された Can-do を比較しながら、考察を加えたい。

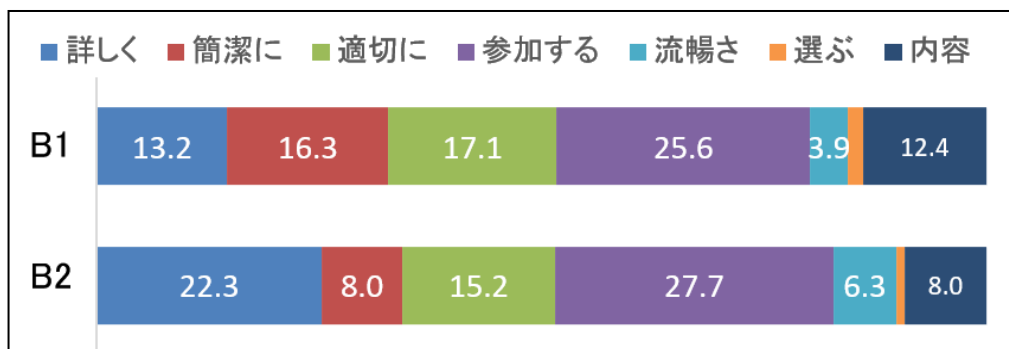


図2 B1とB2のコード付与の割合 (%)

5 考察

本章では、以下7つのコードごとに、B1とB2のCan-doを比較しながら、B2レベルの特徴を明らかにする。なお、紙幅の都合上、引用するCan-doは最小限にとどめる。

5.1 7つのコードの詳細

①簡潔に

B1の方が割合が多いが、下の例のようにB1では「要点」をつかむことが中心であるのに対し、B2ではさらに「要約」することが必要になる。

- ・主張のはっきりした論説的テキストの**主要な結論を把握**できる
(B1.2 情報や要点を読み取る)
- ・いろいろなところから集めた**情報や議論をまとめる**ことができる
(B2.1 レポートや記事を書く)

②詳しく

B2の方が割合が多く、下の例のようにB1では「順序だてて」、つまり「直線的に」詳しく、B2では「関連づけて」「整然と」詳しくとなる。

- ・ 予測不能の出来事（例えば事故など）を、**順序だてて詳細に述べる**ことができる
(B1 経験や物語を語る)
- ・ 適切に要点を強調し、**重要な関連のある補足事項を詳しく取り上げて整然と論拠を展開**できる
(B2.2 論述する)

③参加する

B1 と B2 で割合はあまり変わらないが、下の例のように「ついていく」「発言権」「貢献」が B2 らしきになる。

- ・ 馴染みのある話題や、個人的興味のある話題なら、**対面での簡単な会話を始め、続け、終わらせる**ことができる
(B1.1 発言権を取る (ターンテイキング) / 発言権 (ディスコース能力))
- ・ 母語話者同士の活気に富んだ会話についていくことができる
(B2.2 母語話者同士の会話を聞く)
- ・ **上手に発言権をとって**、会話／談話を始め、続け、終わることができる
(B2 発言権を取る (ターンテイキング) / 発言権 (ディスコース能力))
- ・ 身近な範囲の議論なら、自分の理解したことを確認したり、他の人の発言を誘ったりして、**議論の進展に寄与**できる
(B2 議論の展開に協力する)

④適切に

B1 と B2 で割合はあまり変わりらないが、下の例のように B1 は「ある程度」、B2 は「かなり」「正確さ」を伴う。また、その「正確さ」は、「場や参加者に応じた」ものである必要があり、さらに、「受け手に与える影響」考えて、適切な表現を選択していく力が求められていることがわかる。

- ・ **中立的な、ごく一般的な言葉遣いで**、幅広い言語機能を遂行し、対応できる
(B1 社会言語的な適切さ)
- ・ 公式の言葉遣いでも、くだけた言葉遣いでも、**その場や会話の参加者に応じた適切な言葉遣いで**、はっきりと理解できる。**礼儀正しい言葉遣いで**、自分自身の述べたいことを自信を持って言うことができる。
(B2.2 社会言語的な適切さ)
- ・ 発言内容およびその表現方法について計画を立てることができる。また、**受け手に与える影響を**考えることができる。
(B2 表現方法を考える)

⑤流暢さ

B1 の方がやや割合が多いが、下の例のように B1 では「比較的」であったのが、B2.1 では「ある程度流暢に」、そして B2.2 では「非常に」となり、かなり高度なものが求められている。

- ・事柄を直線的に並べていって、**比較的流暢に**、簡単な語り、記述ができる
(B1 経験や物語を語る／話題の展開 (ディスコース能力))
- ・無理なく自然に、コミュニケーションを行うことができ、長く、複雑な一連の発話であっても、**非常に流暢で**、表現に余裕があることが見られる
(B2.2 話し言葉の流暢さ)

⑥情報を選ぶ

B2 の Can-do は例に挙げたもの 1 つしかなく、B1 も 2 つだけだったので、数としてはかなり少なかった。この数が少ないコードが 3.2 分析の方法 (1) の時点で残った理由は、Can-do すべてに目を通してある際に、他のものとは異質な種類として調査者の印象に残ったためと考えられる。

- ・**必要な情報を見つけるために**長いテキストにざっと目を通し、テキストのさまざまな部分や別のテキストから、特定の課題遂行のための情報を収集できる
(B1.2 必要な情報を探し出す)
- ・幅の広い専門的な話題についての情報や記事、レポートの**内容やその重要度をすぐに見抜き**、綿密な読解の価値があるかどうかを決めることができる
(B2 必要な情報を探し出す)

⑦内容

数値上では B1 のほうがやや多いが、質的にみると B1 は「本人の関心事」など身近な話題であるのに対し、B2 では「たいていのテレビのニュースや時事問題の番組」、「自分の専門外であっても専門記事」と、より幅広い話題への対応が求められる。なお、B2 の受容にかかわる Can-do は合計で 19 件だが、そのうち 4 件は考察の対象外とした「全般」コードで、それを除くと、半数以上の 8 件が「内容」に分類されている。

- ・話し方が比較的ゆっくりと、はっきりとしていれば、インタビュー、短い講演、ニュースレポートなど**本人の関心事である話題**について、多くのテレビ番組の内容をおおいた理解できる
(B1.2 テレビや映画を見る)
- ・**たいていのテレビのニュースや時事問題の番組**が理解できる
(B2 テレビや映画を見る)
- ・専門用語の意味を確認するために辞書を使うことができれば、**自分の専門外であっても専門記事**が理解できる
(B2.2 情報や要点を読み取る)

以上が Can-do の質的分析で得られた 7 つのコードをもとに、筆者らが考えた B2 レベルの特徴である。これを B2 レベルの言語コミュニケーションの特徴として整理すると、以下のようにまとめることができるだろう。なお、数が少ない⑥は除いてある。

- ①「簡潔に」要約したりして伝えることができる
- ②必要な情報を関連付けて、整然と並べて「詳しく」伝えることができる
- ③活発な議論についていき、発言権を取って会話・対話に「参加」することができ、また、スムーズな会話・対話・議論になるよう意見や流れの調整を行うなどの貢献をしながら「参加」することができる
- ④場や参加者に応じて「適切に」ことばを使うことができ、その際、自らの使うことばが受け手に与える影響についても考えることができる

- ⑤かなり「流暢」にことばを使うことができる
- ⑦自分の関心の有無にかかわらずより幅広い「内容」のものを扱うことができるようになる

5.2 B2 レベルの学習者が身につけるべき要素

前述の B2Can-do の質的分析から得られた B2 レベルの特徴は、コード名だけでは先行研究で指摘された特徴（表 1）と同様に、学習者にそのまま提示しても何を学べばいいのか具体的にイメージしにくく、文章にすると複雑になり簡便性が欠如すると考えられる。そこで、学習者自身がイメージしやすく、教師としても授業設計や教材開発の際に参照できる視点として、この結果を再検討し、「B2 レベルの学習者が身につけるべき要素」を提案することにした。

まず、図 3 のように質的分析で得られた 7 つのコードを再構成した。以下に理由を詳述する。

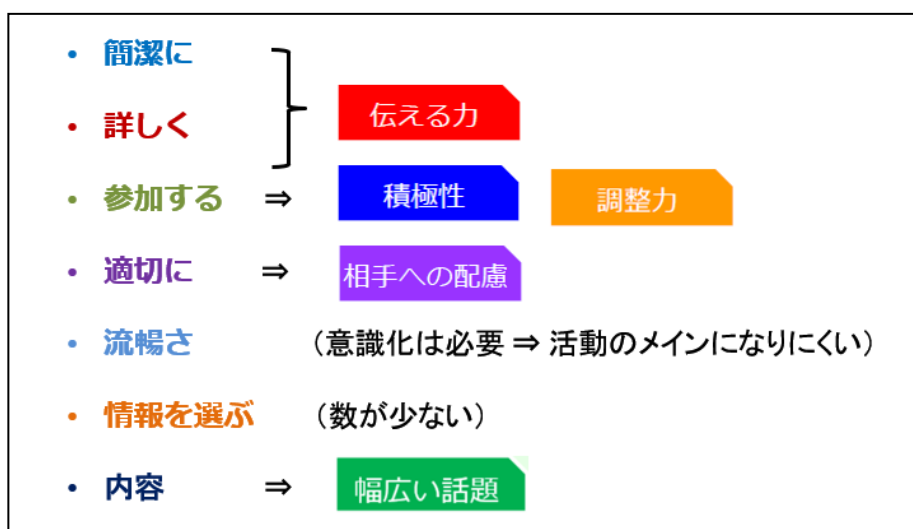


図 3 7 コードの再構成

「簡潔に」と「詳しく」は、「伝える力」に集約した。時と場合によって、「簡潔に要点をまとめて」伝えるのか、相手を説得するために「詳しく」伝えるのかを使い分けていくことが求められるのではないかと考えたためである。

「参加する」は、逆に「積極性」と「調整力」の 2 つに分けた。「参加する」のコードがついた Can-do は、前述の分析では最も数が多く、下位コードの種類も多くなった。話題にきちんとついていく、相手の意見にコメントする、発言権を取って発言する等は「積極性」とまとめ、もう一つの特徴である、やり取りを進行していく、前に進めていく、議論の発展に貢献するという類のものは、「調整力」とまとめることにした。

「適切に」は、「相手への配慮」と言い換えた。相手や場に応じて適切な語や表現を選択していくこと、自分の発言が相手にどのように捉えられるかという視点が必要になることが B2 の Can-do には表れている。この他者の視点、すなわちコミュニケーションの受け手の視点を持つということを明確にするために「相手への配慮」という表現に改めることにした。

一方、「流暢さ」は、B2 ではかなり高度なものが求められ、教師も学習者も意識化する

ことは重要だと考えられるが、授業デザインの際には活動のメインとしては扱いきれないことから、この段階では保留することにした。また、流暢さを意識しすぎると、時に相手が理解しているか否かを判断しながら話すという、コミュニケーションの基本が疎かになる状態に陥ることがある。流暢さはもちろん、評価されるべき要素ではあるが、それ以上に相手に理解してもらえるように話すということのほうが重要であると考え、これは「相手への配慮」の一要素と考えることもできる。

「情報を選ぶ」は前述の通り、Can-do の数自体が少ないので、あえてここで大きく取り上げる必要はないと考えた。

なお、「内容」は、前述した通り、幅広い話題への対応が B2 では求められていること、そのことは CEFR の全体的尺度にも「かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる」という記述があることから、「幅広い話題」と言い換えることにした。

次に前述の7つのコードを再構成した5要素で「B2 レベルで身に付けるべき要素」がカバーできるのかという視点で、CEFR の記述や先行研究、そして筆者らの分析結果を再検討し、先行研究（福島 2009、塩澤他 2010）の中の「視点」に着目した。なぜならば、詳しく伝えたり、調整をしていく際には「多角的な視点」が不可欠なためである。そこで、B2らしさを担保するものとして、「多角的な視点」を加え、最終的に、「伝える力」「積極性」「調整力」「相手への配慮」「幅広い話題」「多角的な視点」の6つを「B2 レベルの学習者が身に付けるべき要素」として提案することとした。

6 教授実践への応用

本研究では、CEFR の Can-do の質的分析を通して B2 レベルの特徴を明らかにし、その結果をもとに「B2 レベルの学習者が身に付けるべき要素」を提案した。今後は、教授実践への応用、すなわち、これらの要素をどのように学習者に意識化させるのか、また意識化させるためにはどのような実践デザインが可能なのかを追求していくことが、課題である。



図4 JFS B2教材

教育実践への応用のプロトタイプとして、筆者らは JFS B2 教材⁴を開発した。この教材には、本稿で提案した「B2 レベルの学習者が身に付けるべき要素」が図 5 に示した通りそれぞれ盛り込まれている。これらの教材を用いた実践の結果、実際に学習者がこれらの要素を意識化することができるのか、意識化することで言語コミュニケーション行動が変わるのか、検証を重ねていくことで、本稿の提案した「B2 レベルの学習者が身に付けるべき要素」の妥当性についても検証が行えるものと考えている。

また、本稿で対象とした Can-do は、分析を行った 2016 年現在に公開されていたものであり、2018 年に公開された「Companion Volume」にて追加された「仲介」や「複言語・複文化」カテゴリーの Can-do は対象としていない。今後は、これらの新規に公開された Can-do を対象に分析することにより、本稿で提案した 6 つの要素の妥当性を検証することも必要である。

注.

¹ JFS は国際交流基金が CEFR を参考に開発した日本語教育のための枠組みである。

² B2 の Can-do は全部で 113 件あるが、「B1 と同じ」と記述される 1 件を除いた。

³ JFS の Can-do (JF Can-do) は、国際交流基金が CEFR を参照して日本語のコミュニケーション言語活動を例示するために独自に作成した Can-do で、レベルは CEFR に準拠している。JF Can-do は国際交流基金「みんなの Can-do サイト」で公開されており、B2 の Can-do は 86 件ある。

⁴ 2018 年 4 月に国際交流基金「みんなの教材サイト」で 4 タイトルを公開した。サイトからは教材冊子、音声・動画、教師用資料、タスク解答、スクリプトをダウンロードすることができる。教材の開発については大船他 (2017) を参照されたい。

<参考文献>

Council of Europe (2001) Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. Cambridge: Cambridge University Press. 吉島茂・大橋理訳・編 (2004) 朝日出版社.

大船ちさと・篠崎摂子・清水まさ子 (2017) 「B2 (上級) レベルの課題遂行をめざした教材開発 —新たな教材像模索の試み—」『2017 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.402-407.

国際交流基金 (2019) 『国際交流基金日本語教授法シリーズ 10 中上級を教える』(第 8 刷) ひつじ書房.

塩澤真季・石司えり・島田徳子 (2010) 「言語能力の熟達度を表す Can-do 記述の分析—JF Can-do 作成のためのガイドライン策定に向けて」『国際交流基金日本語教育紀要』第 6 号, pp.23-39.

福島青史 (2009) 「CEFR 能力記述文のレベル別特徴とキーワード」『ヨーロッパ日本語教育 14』 pp.132-139.

国際交流基金「みんなの教材サイト」 <https://minnanokyozai.jp/>.

国際交流基金「みんなの Can-do サイト」 <https://jfstandard.jp/cando/>.